

回転式離頭銛先 5点

イヌイト

アラスカ・セントローレンス島出土

2,500年前から1,800年代まで

10.5~13.0cm

平成三年度新着資料について

今号の特集では、平成3年度新着資料について実物資料、映像資料ともにその概要と主なものをご紹介します。

昨年度に収集した実物資料

民族資料と考古資料の内訳は以下の通りです。

〈民族〉

- ・イヌイト24点（うち2点は推定）
- ・北西海岸インディアン13点（うちハイダ5点、トリギット3点、ヌートカ3点、マカー1点）
- ・アサバスカ・インディアン6点
- ・ウイルタ3点
- ・ウリチ3点
- ・アリュート、ブラッド、クリー、イロクオイ、ウッドランドインディアン、ナーナイ、アイヌ各1点

合計56点

資料の種別では、食器10点、衣類・装身具7点、狩猟具7点、道具類7点、楽器3点、バスケット3点の他、儀礼に関わるものなどです。

大部分の資料は北アメリカから収集したもので、イヌイトの資料の多くは、19世紀末に西南アラスカを中心として収集されたと思われる一括コレクションのなかから厳選したものです。

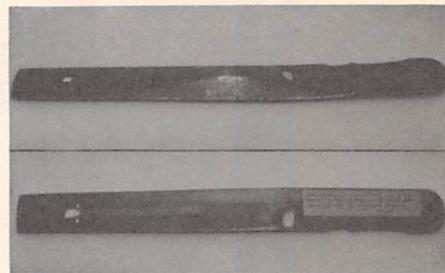
以下に主な資料を取り上げて解説します。

・投槍器（北西海岸インディアン）

カヤックなど舟から銛や槍を遠くまで正確に飛ばすための道具。先端の鉤に槍の柄の尻あるいは中央部のフックを引掛けて、“てこ”的原理を応用して投げる仕組みになっています。背側は黒、腹側全体と背側の握り部分は赤く塗ってあり、それぞれ毛皮と血とを表すといわれています。このような色使いは、ベーリング海側の地域に見られるようです。

・ガラガラ（イロクオイ）

カミツキガメを用い、空洞の腹の中に植物の種子を入れた楽器。病気治療などの儀礼に用いられるものです。



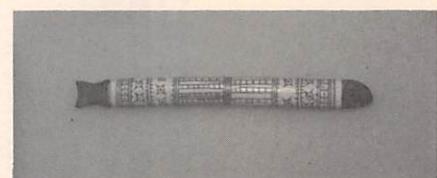
投槍器



ガラガラ

・針入れ（イヌイト）

ふた付きで魚の形をした針入れは、西南アラスカに特有のものといわれています。鳥の骨で作られた筒の部分には線刻がほどこされ、頭と尾は木製で口には赤く色がつけられています。



針入れ

・火薬フラスコ（イヌイト）

イヌイトやインディアンにもたらされた品物は各自に十分行き渡るほどではなく、初期の先込め銃に関わる品々も、ヨーロッパの物を真似て作られていました。ふたに使われている薬莢も交易品です。

・バスケット（アリュート）

細くよった草を素材にしたバスケットで、ところどころに赤、朱、青の毛糸が編み込まれています。製作地はアリューシャンで、精緻な作りからもアリュートのものと考えられます。手提げとして使っていたものと思われ、赤いリボンが付いています。



火薬
フラスコ



バスケット

・皿（アサバスカ・インディアン）

厚みのある木を彫った皿で、縁が赤く塗られ、黒い線の縁取りがあります。内側の中央には4頭のアザラシが描かれており、消えかかってはいますが首から鼻先の幅で交差した黒線が見えます。イヌイトの線画には網にかかったアザラシを描いたものがありますが、その影響を受けた可能性があります。

＜考古＞

- ・湧別町川西オホツク遺跡の竪穴住居跡1か所の出土遺物 コンテナ (54×34×15cm) 30箱
- ・トビニタイ遺跡出土の石器 2点
- ・海底から引き上げられた石錐、獸骨 2点

川西オホツク遺跡について「博物館だより2号」で報告していますので、ご参照ください。

これら新着資料の一部は、常設展示資料に加えられたり、常設展の展示替えや特別展などで公開される予定です。

映像資料

＜動画（ビデオテープ）＞

民族別の内訳は、

- ・サミ13本 ・イヌイト5本
- ・北西海岸インディアン2本（うち海岸セイリッシュ1、ベラクーラ1）
- ・ハンティ1本

の合計21本です。

＜写真＞

サハリンの民族 74枚

ビデオのサミ13本は全てノルウェーのStatens Filmsentralが配給しているもので、トナカイ飼育と伝統技術としての衣服や住居、橇などを作る過程を追ったシリーズ作品です。1970年代なかばから80年代前半に制作されたものですが、非常に詳しく再現されています。

今回の収集資料には1910～20年代の古い映像資料が4本含まれており、民族学にムービーカメラが投入された初期の貴重なものばかりです。なかでもW. V. ヴァリンの「Tip Top of the World (世界の頂上で)」は1912、19の各年にアラスカ北部で撮影されたもので、当時のイヌイトの生活を知ることのできる数少ない映像です。

これらの映像資料は研究素材として利用されるとともに、講座・講習会で上映されたり、一部は再編集され情報普及室の閲覧用ビデオとして公開される予定です。



皿

○平成4年度第1回講習会

アイヌ民族の工芸

講師／財)アイヌ無形文化伝承保存会理事 杉村 京子 氏

平成4年度になって最初の講習会を、5月24日開催しました。講師はアイヌ無形文化伝承保存会理事の杉村京子氏です。杉村氏は、母キナラブック氏（伝統工芸、口承文学の伝承者として有名。故人）の影響をうけ、工芸の製作方法をおしえたり、アイヌ口承文学の録音作業にかかわるなど、アイヌ文化の伝承保存に貢献されています。

講習会では杉村氏の半生にまじえ、実際に、工芸品や材料をお示しいただきながら、アイヌ民族の工芸について、お話しいただきました。お話のなかで杉村氏は、材料となる木の皮を、「とつてくる」と言わず、「いただいてくる」と表現していました。神様がわたしたち人間に与えてくれる、それをいただいてくるとのことです。こうした、自然に対する気持ちなどにもふれていきました。参加者は、杉村氏のお話をきき、アイヌ民族の工芸品を手にとってみて、工芸の美しさや技術のすばらしさとともに、アイヌ民族の文化を残していくたいという、杉村氏の思いを感じたのではないでしょうか。

講習会に持参いただいた、工芸品はすべて、シナノキの皮を材料としているもので、袋物と、背負い紐（荷物やこどもを背負うときに用いる）でした。以下には特にシナノキの皮を材料とした工芸についてのお話を紹介します。



材料であるシナノキの皮をはぐときには、1本の木から三分の一だけをいただき、残った木の皮がはがれてこないように、木の皮で帯をする。シナノキの皮は一本の木を、下から上まで、枝のところまでもはぐことができる。はいだ木の皮は、きれいな流れに15日から20日間前後、石を重しにしてつけ、その後、洗ってからよく乾燥させた。こうしないとかびがはえてくる。シナノキの皮は十分にやわらかくしておかないといいものがつくれない。

また、機織りをして反物をつくるときには、やわらかくて、あたたかみがあるオヒヨウたんものという木の皮を用いる。

やわらかくしたシナノキの皮は、たださいただけでは弱いので、1本、1本力を入れて、指先でよっていく。こうすると糸は丈夫になる。こうしてつくった糸で、背負い紐などをつくる。

背負い紐は、模様で何を背負うにつかわれるかがきまっている。また、こどもを背負うときには、わきのひもをからだにしっかりしばり、こどもを落とさないようにするが、荷物を背負ったときには、わきのひもはしばらない。こうしておくと、クマに会ったときに、素早く荷物を落として、体をかるくすることができます。

袋物の白いところは沼に生えているガマを使っている。色のついているところは、染めたところで、染め粉はつかわずに、くるみの実の皮をつかっている。茶色は、鉄分の多い沼にしづめて染めた。



今年の民族学会・研究大会は、名古屋市の南山大学で開催されました。2日間で一般の発表が92本、分科会が6つおこなわれました。そのなかから、当館の展示や調査研究にたいへん関連の深いものについて紹介します。

●「在米アイヌ関係資料の民族学的研究」

小谷凱宣氏（名古屋大学）が代表をつとめる分科会では、まずははじめに同氏から、本研究の目的、経過などが報告されました。1983～85年にヨーゼフ・クライナー氏（ドイツ日本研究所）らによって、ヨーロッパのアイヌ資料について調査が実施されました。それに続いて今回、1990年度から3年間の予定で、アメリカ、カナダの博物館に所蔵されている約3千点のアイヌ資料の調査を開始し、すでに85%が終了していることが報告されました。

調査の目的としては、(1) 北米各地のアイヌ資料を網羅的に調査し、その一覧表を作成すること、(2) 収集した情報をもとに、アイヌ文化、特に

日本民族学会 第27回研究大会 5. 23, 24 於：名古屋

物質文化の全体像の理解を深めること、(3) 欧米両地域の研究成果から、今後のアイヌ研究のため、基礎資料のデータベース化をはかり、さらにはアイヌ文化の時間的・空間的な分布に関する座標軸を構築し、それを日本におけるアイヌ文化研究に活用することがあげられています。

一方、今までの調査からは19世紀後半から今世紀初頭に収集された資料が北米東部および中西部の博物館に収蔵されていること。その大部分は明治末から第1次大戦までの間に集中的に集められたこと、さらにはそのかなりのものに北海道在住のジョン・バチエラ師が関与していたことが明らかになったと述べられました。

この背景には明治年間の良好な日米関係、1900年頃におけるアメリカ人類学の発達があったこと、さらにアメリカでの博物館設立の歴史がアイヌ資料の分布に反映していることが報告されました。

引き続き、ヨーゼフ・クライナー氏がヨーロッ

パにおけるアイヌ資料は全体で約7千点であり、それが50か所の博物館に保管されていること。また、19世紀後半に渡ったものが多く、収集地はサハリンと北海道がほぼ半々であるという調査結果を報告しました。

次に、今回の調査メンバーである佐々木利和氏（東京国立博物館）からは、北米の博物館に収蔵されているアイヌ資料のうち、ブルックリン博物館（ニューヨーク市）収蔵のアイヌ絵、衣服について、出利葉浩司氏（北海道開拓記念館）からはアメリカ自然史博物館（ニューヨーク市）にある衣服について、スライドを交えながら紹介がありました。最後に切替英雄氏（北海学園大学）が、アイヌの叙事詩「虎杖丸の曲」のなかの衣服に関する情報と博物館資料との対照結果などを発表しました。

●「サハリンのウイルタに関する予備的考察」

井上紘一氏（中部大学）からは、サハリンに住むウイルタに関する発表がありました。少なくとも19世紀のウイルタは、サハリンのツンドラ地帯に生活していたこと、トナカイを飼育していることが周辺に住むアイヌやニブフからウイルタを分かつ重要な指標であること、日露戦争の結果、彼らは北緯50度線を国境として南北に分断され、両国の地域開発の進行とともに、伝統的な生活様式が徐々に変化したことが述べされました。同氏は1991年夏にサハリンのポロナイスク、ヴァール、オハの3か所を訪れ、それぞれでウイルタが173、127、11人（合計311人）を数えるにすぎないことを確認しました。同氏は、本年度も引き続きサハリンでウイルタの現状について調査をおこなう予定です。

この他、北方地域に関する次の発表がありました。

- ・カナダ・ニシカ族のポットラッチ」渥美一弥氏（横浜外語ビジネスアカデミー）
- ・「現代のカナダ・イヌイット社会における食物分配について（その2）」岸上伸啓氏（北海道教育大学）
- ・「植民地主義と日本民族学」中生勝美氏（宮城学院女子大学）

（学芸課 佐々木亨）

○平成4年度第1回講座

北の台所について

講師／日本民俗建築学会運営委員 宮崎 玲子 氏

日本はもとより世界50余か国の民家、特に「台所・食空間」の調査を長年続けている宮崎玲子氏を講師に迎え、6月21日に講座を開催しました。

今回は一昨年の夏に訪れた、カナダ北東部バフィン島のイグルーリック村における現代のイヌイトの食生活を、ご自分の体験をもとにお話しいただきました。以下にその要旨を紹介します。

骨つきカリブーを食べる

イグルーリックへは、カナダのオタワから飛行機を利用して、途中イカリット（英語名：フロビッシャーベイ）で1泊の道のりである。イグルーリックは北緯70度にある人口300人足らずの村で、村の人口の99%は純粋なイヌイトである。

村の中で最もモダンな3階建てのテラスハウスでは、鍋で2時間も煮込んだ骨つきのカリブー（トナカイ）が準備されていた。イヌイトの人たちは好みの部分を鍋から取って、そのままかじったり、口元で器用にナイフを使ったりして食べていく。これは昔ながらの食べ方である。食べ物に味付けをしないのが伝統で、肉はただ煮ただけである。しかし一度都会へ行くと、調味料なしでは物足りなくなるという。調味料をもつことがステータスシンボルの1つにもなっている。

一方、極北地域では植物から必要なビタミンをとることはほとんど不可能であるため、そこに生活する民族はアザラシやトナカイなどの肉を生で食べることにより、栄養のバランスをとってきた。もちろんイヌイトも例外ではない。ただし今では、村のスーパーに野菜や果物が豊富に並べられている。

現代のイヌイトの住まい

今日の住まいは、一般的に1メートルぐらいの杭の上に床を張り、断熱処理を施した、セントラルヒーティング完備の家である。アザラシの脂肪を暖房に用いていた頃は、床が地面の高さに近い雪の家（イグルー）に住んでいたが、セントラルヒーティングになり、ツンドラの地に配管設備を埋め込むことができず、床が地面よりも高くなつた。また、室内のどこにいても裸でくらせる暖か



さであるため、出入口の風除室には、皮肉なことに大型冷蔵庫がおかれ、食糧が保存されている。

台所には、皿やお盆といったものがあるが、それらを使用することは稀で、魚を解体するときには、かつて使っていたようなウル（女性用ナイフ）などを手にもって、テーブルを汚さないようにと、段ボールの上で魚を切っていく。

セイウチの肉の発酵

遠く日本からの客に、イヌイトの人びとはさまざまな伝統的料理を用意してくれたが、忘れてならないものの1つに発酵させたセイウチの肉がある。夏に捕ったセイウチを解体し、肉を2キロ程のブロック状にわけ、1つずつはいだ皮で包み、海岸に埋めておく。7、8月の一日中休みなく照りつける太陽の熱により、徐々に発酵が進んでいく。食べごろの12月になると肉の周辺は白くなり、なかはハムのようになる。もともとこれは夏には食べられないものだが、冷凍保存でいつでも好きなときに食べられるようになった。

当館でも、イヌイトに関する展示をしていますが、それはおもに伝統的な生活様式の紹介です。この講座でイヌイトの現在のくらしづりが、講師の撮影したスライドをとおしてみたいへんよくわかり、参加者にとって興味深かったように思います。また、現代文明の恩恵を受けながら、ある部分では伝統的な生活様式を保ち続けていることがわかりました。

寄贈資料紹介

○サハリンの民族資料等の写真

サハリンで撮影された写真103点が東京都目黒区の田中淑乃氏から寄贈されました。

○哈尼族の布袋

中国雲南省・哈尼族の布袋1点が秋田県能代市の熊谷健氏から寄贈されました。

執筆者ならびに出版社から贈呈をうけた書籍（4月～6月）

煎本孝 *Ainu Bibliography* 北海道大学 1992

Okada, Hiroaki and Atsuko Okada *The Hot Spring Village Site* 1974

Okada, Hiroaki et al. *The Hot Spring Village Site 2* 1976

Okada, Hiroaki et al. *The Hot Spring Village Site 3* Hokkaido University 1979

Okada, Hiroaki et al. *The Hot Spring Village Site 4*

Okada, Hiroaki et al. *The Hot Spring Village Site 5* Hokkaido University 1986

谷川健一責任編集『琉球狐の世界／海と列島文化6』小学館 1992

宮崎玲子『台所から覗く北の国と南の国』上下 原書房 1992

宮崎玲子『ミニチュアで見る世界の台所』福音館書店 1992

渡辺仁他『平成3年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査XⅠ』

北海道教育委員会 1992

主な来館者

4/10 在札ロシア連邦総領事 I. A. アブドラザコフご夫妻他5名(網走・

サハリン友好協会設立準備委員会
の招き)

- 6/30 木村英明氏(札幌大学教授)ら
「古代細石器文化に関する国際シンポジウム」参加研究者41名
6/30 谷本一之氏(北海道教育大学長)

観覧者動向 4月～6月

4月	1,628名
5月	4,671名
6月	4,802名

昨年度の総観覧者数は42,430名でした。

みんぞく こうこ はくぶつかん

in Hokkaido (4月～6月)

- 4/9 道教委のアイヌ民族に関する高校
向け指導の手引き、日本は単一民族でないと明記／A S
4/21 強制移住の権太アイヌ国内235世帯
確認、ウタリ協会初の調査／A S
5/3 苦前に古代の里オーブン、竪穴式
住居やチセ復元／D
5/27 「忘れ去られた人々 北千島アイヌ民族」連載開始(6/1まで6回)／D
6/19 余市大川遺跡から2～3世紀中國
製鉢の耳飾り国内初出土／D
6/21 故アービング博士「北方圏研究」
文献3000冊や民族資料を開拓記念
館へ寄贈／D
6/26 伊達市で擦文期?の人骨4体発掘、
アイヌ民族との関係注目／D
6/30 白滝は細石刃の「工場」だった?
旧石器時代の東アジア探るシンボ
ジウム札幌・白滝で開催／D

* A S 朝日新聞(道東北網版)

D 北海道新聞(オホーツク版)

絵ハガキ・ テレフォンカード販売

この5月より当館受付けにて、オリジナルの絵ハガキとテレフォンカードの販売を始めました。絵ハガキは1枚50円、8枚セットですと300円、テレフォンカードは博物館外観と開館ポスターの図柄の2種類で、それぞれ50度数800円です。



編集後記

網走の短い緑の季節、仕事と趣味と実益(?)を兼ねて森などを歩き回るようになっている。動植物の種やそれが見られる時期には、札幌と若干の違いがあることに気づく。

関東在住のアイヌ研究者が「北海道に住む利点は、季節感があることくらいかな」とおっしゃっていた。確かに情報の集積される中央の方が本入手するにも便利で、1時間半も飛行機に座っていれば東京から北海道に入ることができる。

自然のなかでの生活体験は文化を知るうえでさほど重要ではないのか、北海道に居てここならではの何ができるのか、考えさせられる。(齋藤)

Q

“回転式離頭銛”という資料は、展示のいろいろな場面で登場していて古い物もあるようですが、いつごろからどのような人びとが使っていたものか、教えてください。

A 回転式離頭銛は海獣狩猟用の銛として、古いタイプの非回転式離頭銛にかわって約3,500年前から北アメリカや北東シベリアの極北地域にあらわれ、北太平洋や北極海沿岸の海獣狩猟で用いられてきました。イヌイットの回転式離頭銛はカナダ極北地域のインディアン文化に由来し、イヌイット文化にひろく受け入れられたと考えられています。このタイプの銛は動物に打ち込まれて90度回転することによって、銛先全体が皮下脂肪層下に入り、非回転式銛のように銛先の一部が対外に露出することができません。このことによって銛先の脱落を防ぐとともに、氷海において氷との接触による銛先の破損をなくすことができます。したがって回転式離頭銛は季節的にでも海氷が存在する地域で発達し、イヌイットをはじめチュクチ、コリヤーク、沿海州沿岸の民族や北海道

でも使われてきました。北海道では縄文時代から登場し、擦文文化やオホツク文化を経て、アイヌにも受け継がれてきました。

(学芸課 渡部 裕)

'92. 7~10の行事

- ・6/29~7/25 湿別町川西才ホーツク遺跡発掘調査
調査担当者 青柳主任学芸員
- ・7/21~8/23 第4回特別展「サハリン先住民の精神世界」
- ・7/26 第1回講演会
「北東アジアの民族形成の諸問題—アレクセーエフの見解にもとづいて—」
講師 加藤九祚氏（創価大学教授）
- ・8/9 第2回講習会
「北方民族の玩具」
講師 笹倉いる美（当館学芸員）
- ・9/6 第2回講座
「海外のアイヌ民族資料」
講師 佐々木利和氏（東京国立博物館主任研究官）
- ・10/4 第3回講習会
「北方民族の有用植物」
講師 斎藤玲子（当館学芸員）
10/4の講習会をのぞき、講演会、講習会、講座はすべて午後2

時から講堂で開催します。第3回講習会は1時30分より講堂で説明後、野外で観察を行います。参加はすべて無料です。

「研究紀要 第1号」発行

内容は以下のとおりです。

- 大林 太良
「北太平洋地域の神話と儀礼における鮭」
- 中村 齋
「アムール河下流域のアイヌ系ウリチの存在について」
- スチュアート ヘンリ
「ネツリック・イヌイットの漁撈—夏の築漁を中心にして」
- 渡部 裕
「アイヌの海獣狩猟」
- 青柳 文吉
「湧別川西遺跡発掘調査概要報告」
- 佐々木 亨
「イヌイットの堅穴住居復元の記録とPoint Barrow type houseについて」
- 斎藤 玲子
「北方地域の植物性染料、特にハンノキの利用と信仰について」
- 笹倉 いる美
「ウイルタ語におけるトナカイの名称に関する覚え書き」

第4回特別展

サハリン先住民の精神世界

平成4年7月21日（火）～8月23日（日）／休館日 月曜日

観覧料	一般	高校生・大学生	小学生・中学生
	250(200)円	80(50)円	50(30)円

かっこ内は10人以上の団体の場合

大陸や北海道と深い関わりをもつサハリンには、ニブフ、ウイルタ、アイヌなどの先住民が狩猟、漁撈、採集、あるいはトナカイ飼育を生業としてきました。自然のなかで生きていくために、自然界を支配する「超自然的な世界」と友好関係を保つ必要があるとする信仰から発達した共通の観念や儀礼について、太鼓や木偶などの資料とシャマンの映像をとおして紹介します。

